
論文

保育者養成における ESD 教材作成のプロジェクト型演習

山本 一成

滋賀大学教育学部

Project-Based Seminar on ESD Teaching Materials for Preschool Teacher Training

Issei YAMAMOTO

Faculty of Education, Shiga University

This research describes the learning process of pre-service preschool teachers through a project-based seminar on ESD teaching materials. A two-year ESD seminar for junior and senior students was planned, based on the pedagogy of “creative learning” and project-based activity. The content was not predetermined but was developed flexibly based on the students’ opinion. As the seminar progressed, the students decided to create a version of backgammon as a teaching material to learn the SDGs. The result of the study suggests that the following learning has been achieved: (1) deeper interest and understanding of the SDGs, (2) thinking about the relationship between each goal, (3) thinking about the relationship between the SDGs and daily life, (4) strategies for designing ESD teaching materials using knowledge about the SDGs, (5) understanding the SDGs as something of personal relevance, and (6) acquisition of the “learning by creating” strategy. The project-based approach was shown to be effective in helping students gain practical ESD knowledge and skills.

Keywords: ESD, SDGs, preschool teacher training, creative learning, project-based learning

1. 研究の背景と問題

1-1. 保育者養成に ESD の観点を導入する必要性

2015 年の OMEP（世界幼児教育保育機構）の世界大会・総会において、「世界の未来への鍵：幼児教育実践者」と題された宣言が採択され、2030 年までの SDGs（Sustainable Development Goals）の実現のために、すべての国や地域で幼児教育と保育者養成に ESD（Education for Sustainable Development）の教育学とカリキュラムを取り入れることが呼びかけられた¹⁾。

幼児期は、ESD の基礎として捉えられており、遊びによる具体的な経験を通して、保護者やコミュニティを巻き込みながら、生活のプロジェクトを通して学んでいくことが目指されている（UNESCO 2008）。ESD として取り組まれる課題は国や地域によってさまざまであり、実態に沿った形で保育者養成に ESD の観点を取り入れることが目指されている（大庭・弘田・春木・森 2020）。

このような流れのなかで、幼児期の ESD に関する研究は年々その数を増しているが、保育者養成のカリキュラム

に十分にESDの観点が入り込まれていないことや、持続可能性へ向けた教育実践についての保育者の理解が進んでいないことの問題が指摘されている(Inoue, O’Gorman, Davis & Ji 2017; 谷口 2020)。幼児期のESD実践を豊かなものにしていくためには、まず保育者養成の段階でどのようにESDの観点を含んだ養成教育を行っていくかを検討することが課題となる。

1-2. プロジェクト型の保育者養成カリキュラム

一方、VUCAと呼ばれる予測不可能な変化を迎える時代のなかで、教育全体の在り方が見直されるようになっていく。OECDが示す「ラーニング・コンパス」では、教育は、個人や社会のウェルビーイングに向けて、学習者自身が自らの予想・行動・省察に基づき新たな価値を創造していく営みとして捉えられている²⁾。このような状況のなか、教員養成・保育者養成についても、与えられた知識を受動的に学習していくのではなく、能動的に学んだ知識を活用していく方向性が目指されるべきだろう。

井庭(2019)は、ひとりひとりが創造によって学ぶ教育の在り方を、「クリエイティブ・ラーニング」という概念で捉えている。「クリエイティブ・ラーニング」は、「つくることによる学び」である。それは、学習者自身の活動がベースとなる点で、「アクティブ・ラーニング」や「プロジェクト・ベースド・ラーニング」という要素を備えているが、あらかじめ与えられたゴールに向かう能動性を指すものではない。「何かを『つくる』ことは、つくり始める時点ですでに自分のなかにある何かを外に出すということではなく、つくることによって新たな発見が生じ、学びが深まり、成長につながるという『構成的』なものである」(同書:p.14)と述べられているように、それは予定調和的なプロジェクトではなく、想定外の出来事との出会いのなかで、つくる側自身も変容しながら進められていくプロジェクトによる学びである。

「クリエイティブ・ラーニング」において、教師は知識を教えたりスキルを身につける機会をつくったりする「ティーチャー」や「インストラクター」、話し合いの流れを促す「ファシリテーター」でもなく、一緒に「つくる」ことに参加する「ジェネレーター」という役割を担う(同書p.16)。教師は、学習者とともに創造活動に参加し、ときに手がかりを示したり、自らも手を動かしたりしながら、学びを支援していく役割を担うことになる。

幼児期のESDにおいてもプロジェクト型の学びが有効

であることが指摘されている(Ji & Stuhmcke 2014)。ESDを保育者養成に取り込んでいく上では、「クリエイティブ・ラーニング」に示されているような「つくることによる学び」を実践していくことが、保育者としての資質の向上にもつながると考えられる。

2. 方法

以上の問題意識から、筆者が担当した一連のゼミナール形式の授業(「幼児教育学演習Ⅰ・Ⅱ」「幼児教育学研究法Ⅰ・Ⅱ」)にて、ESDをテーマにしたプロジェクト学習を計画した。期間は、2020年4月～2021年12月であり、受講生は5名であった。3回生の春学期から4回生の秋学期にかけて、同一メンバーが受講した。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、授業はオンラインと対面を併用しながら行われた。また、卒業論文指導を兼ねた授業であったため、当プロジェクトの内容以外にも、論文指導などに充てられた日程もあった。

本授業では「クリエイティブ・ラーニング」の立場に立ち、受講生自身が何かを作り出すなかで、知識を学習し、活用することを目指し、プロジェクト型の授業実践を行った。プロジェクト型の学習の特徴は、受講生自身の興味・関心の展開や、対話のなかで生成する意見、偶発的に生じるイベントや外部からの依頼といった、偶然性を内包した創発的カリキュラムによって展開する点にある。そのため、本授業も当初の計画とは異なる形で展開したことが多かったが、「つくることによる学び」「幼児期のESDについての能動的学び」というカリキュラムの方向性については一貫して授業を行った。結果的に授業で展開した内容は以下のとおりである。

- ①SDGsの「子どもことば」への翻訳(3回生春学期: 2020年6月～7月)
- ②すごろくづくり(3回生秋学期: 2020年10月～2021年1月)
- ③附属幼稚園でのプレゼンテーション(4回生春学期2021年5月11日)
- ④附属幼稚園と連携した行事でのESD実践(4回生春学期: 2021年7月17日)
- ⑤児童館および附属小学校での実践(4回生秋学期: 2021年10月～12月)

授業当初に計画されていたのは①の内容のみであった。

①の課題に取り組んだのち、受講生から主体的に ESD を実践してみたいという意見が出てきた場合は、その後実践的なプロジェクトを展開し、そうでなかった場合はテーマの変更や文献での研究を中心に展開する計画であった。そのため、②以後の計画は、①の受講生に対する形成的評価に基づき、授業の展開に沿って再計画されていったものである。また、「すごろくづくり」という内容も、筆者が当初から意図していたものではなかった。

4 回生の最終回の授業では、プロジェクト全体のまとめとして振り返りシートを作成し、その記述から、受講生に得られた学びについても考察を行った。

なお、授業のプロセスを記録し研究論文として発表すること、提出された課題の一部を匿名で転載する場合があることについて、口頭および課題の紙面で受講生に説明を行い、同意を得た。

3. プロジェクト型学習の展開過程と受講生の学び

3-1. ① SDGs の「子どもことば」への翻訳

3 回生春学期の段階では、受講生は SDGs という言葉は知っていても、その内容についての関心や知識が十分ではない状態であることが予想された。そこで、「持続可能性」を身近な事象と結びつけることで学習の動機付けを高めることを狙い、SDGs を幼児が理解できる言葉に翻訳するという作業を行った。

まず、導入として、日本国憲法を子ども向けの言葉に翻訳した『井上ひさしの子どもにつたえる日本国憲法』（講談社、2006 年）を講読し、難解な用語を子どもの身近な言葉に置き直すことの意味についてディスカッションを行った。その後、SDGs を幼児が理解することのできる言葉に翻訳する課題を各自で行った。作成した課題は全員で共有し、お互いの注目した部分の違いを参照しながら、原文の内容解釈を進めていった。以下に提出された課題の具体例を示す。なお、本課題は SDGs を平易な言葉で語ることが ESD であるという趣旨ではなく、あくまで受講生自身の SDGs 理解を進めることを目的としたものであることは、あらかじめ全員に共有した。

目標 1. [貧困] あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ

【翻訳例】

世界中のみんながお腹いっぱいご飯を食べて、いっぱい寝て、いっぱい遊んで、心の底から楽しいって思う生活を送れるようにしよう

目標 5. [ジェンダー] ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る

【翻訳例】

『女の人は料理をするもんだ』『男の人は力持ちだ』なんて誰が決めたの？男の人でも料理上手な人がいるし、女の人だって力持ちな人がいるよね。みんなの「できること」を合わせたら、「できないこと」なんて無いんじゃないかな。「男だから」「女だから」なんて言うのはやめようよ。

目標 7. [エネルギー] すべての人々に手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する

【翻訳例】

もしも、電気や火が使えなかったら…って考えたことあるかな？電気が使えなくなったら夜は明かり一つなくて真っ暗になっちゃうし、火が使えなくなったらごはんも簡単に作れなくなる。これって大変なことだよ。でも、今みんなはスイッチを押すだけで電気や火をつけられる。これって魔法みたいで、すごいことなんだ。世界のみんながこの魔法を使える世界にしようよ。

目標 9. [インフラ、産業化、イノベーション] 強靱なインフラを整備し、包摂的で持続可能な産業化を推進するとともに、技術革新の拡大を図る

【翻訳例】

みんなが生活する中で必要なものって何だろう？例えば、家なんて絶対必要だよ。みんなの周りの大人の中には、どうしたらもっと強くて台風や地震がきてもつぶれない家ができるか、毎日考えてくれている人がいるんだ。みんながもっといいものを作ろうとする世界っていいね

目標 14. [海洋資源] 海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する

【翻訳例】

海には魚がいっぱい住んでいるよ。住んでる海にごみを捨てられたら、魚も嫌だよ。魚たちが気持ちよく泳いだり住んだりできる海を作ろう

目標 16. [平和] 持続可能な開発に向けて平和で包摂的な社会を推進し、すべての人に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包摂的な制度を構築する

【翻訳例】

ずっと喧嘩しているより、仲良くしている方が嬉しくなるよね。いろんな国にいるお友だちみんなが、自分たちが住んでいる国で平和で安心な生活ができるように、その国にあるルールでみんなを守って、さらにみんなを守るルールをどんどん作っていこうってこと

具体例からも読み取れるように、SDGsの翻訳は、原文の含意をすべて汲み取れているものではない。しかし、幼児に理解できる言葉を選んでいくなかで、抽象化された目標を具体的な幼児の生活と結びつけながら、表現しなおすという作業が行われている。このような作業を行うなかで、受講生はSDGsの目標ひとつひとつが意味することについて丁寧に解釈し、これらの目標が身近な生活とどのように関連するのかを考えることになったことが推察される。

3-2. ②すごろくづくり

「子どもことば」への翻訳作業を経て、そもそもESDとは何かを考え、その是非を問う授業を行った。幼児期にESDを導入することのジレンマについての論文(山本2021)を講読し、幼児期にESDを実践することの意味についてディスカッションを行った。具体的には、幼児期のESDへの消極的意見(「幼児にはテーマが難解」「幼児期は環境破壊や格差といったネガティブな話題に触れるべきではない」「大人の教育的意図よりも幼児の生活や遊びを優先すべき」と、積極的意見(「幼児も地球環境を共有する権利主体である」「幼児は将来世代の利益を代表する」「ESDのテーマは幼児の生活体験と深く関連している」といった観点を整理して議論した。

その結果、幼児期のESDは、以下のような条件の下で

積極的に行われるべきだという共通見解が受講生によってまとめられた。

- ・ESDが行われる際は、それを幼児自身が楽しめることが前提である
- ・SDGsの内容は、幼児たちにとって身近なもの、すでに経験している事柄との関連において扱われるべきである
- ・遊びのなかでSDGsのロゴに触れるというやり方が考えられる
- ・身近な環境や絵本などを通して、日常の体験とSDGsの関連に気づくような仕掛けをつくることができる

本授業は創発的カリキュラムを重視したものであるため、受講生がESD実践に消極的な結論を導き出した場合は、その後の授業展開を文献研究等の方向へ変更することを計画していた。結果的に、受講生はESDに積極的な態度を示したため、「プロジェクト型」の学習へとカリキュラムを展開した。その後の議論は、受講生が自分たちでどのようにESDを実践するかという方向で展開した。その過程で、「カードゲーム」「迷路」「スタンプラリー」といった遊びの仕掛けのなかにSDGsに関連する体験を織り込むという方法が議論され、最終的には「すごろく」を教材として作成するという方向に意見がまとまった。

プロジェクトを進める過程では、「スクラム」(サザーランド2015)の手法を参考に、教員(筆者)はプロジェクトの進捗状況をアセスメントしつつ、問題が発生した場合の対処方法や必要な資源の提供を中心的な役割として関わった。また、スクラムの手法ではプロトタイプを発信・改善することによって目標到達への推進力を高めるアプローチをとることから、下級生との交流の時間を設け、教材のプロトタイプを実際に遊んでもらうことで意見を得るなど、「つくることによる学び」を充実させるカリキュラムマネジメントを行った。完成したすごろくを写真1に示す。



写真1 すごろく教材

すごろくは、SDGsの17の目標のロゴが示されたマスを含んでおり、各マスに貼られたロゴをめくると、SDGsに関連するミッションが与えられるという仕掛けがある。たとえば、目標8「経済成長と雇用」のマスでは「きみは大きくなったら何になりたい？みんなに伝えてみよう。言えたらシールをもらおう」、目標14「海洋資源」のマスでは「ちょうせんじょう〜うみの中にはいろいろな魚がおよんでいるよね！魚のものまねできるかな？さかなのなまえ3ついえるかな？どっちかできたらシールをもらおう！」といった形で、その場でほかのプレイヤーと体験を共有できる仕掛けがつけられている。また、与えられたミッションをクリアすると、SDGsの各目標のイラストが描かれたシールをもらうことができ、それらを台紙に貼って集めていくことができる。また、ほかにもコインの増減の要素があり、目標9「インフラ・産業化・イノベーション」のマスでは「たいへん！水道代と電気代をはらいわすれちゃった。水と電気が使えなくなった。3コイン払ってシールをもらおう」といったように、コインを使用するミッションが与えられる。また、募金マスがあるほか、コインを得ることのできるミッションもある。

教材の作成にあたっては、幼児が楽しめること、遊びのなかでSDGsに触れることが重視され、シールやコインを得るといったゲーム的要素のなかに、SDGsを関連させていく方向で制作された。

3-3. ③プレゼンテーション

プロジェクト型の学びでは「発表」の機会が重要な意味を持っている（藤原 2020）。そこで、作成したすごろくについて、附属幼稚園に意見を聴いてみてはどうかという提案を行った。

その際、あらかじめ教員側が附属幼稚園と交渉して実践の機会を用意するのではなく、受講生自身から附属幼稚園

に依頼を行い、すごろくを活用した保育実践の機会を求めるプレゼンテーションを行った。

プレゼンテーションの結果、附属幼稚園からは、内容の一部が幼児教育の実践にも関連していることや、幼児教育でESDを実践することへの共感が得られた一方で、すごろく教材によるESD実践はむしろ小学校に向いているのではないかという意見が得られた。結果的に、新型コロナウイルスの感染拡大の影響もあり、保育中にすごろく教材を用いてESDを実践することは見送られた。

3-4. ④附属幼稚園と連携した行事でのESD実践

保育中のすごろくを用いた実践については見送られたものの、その後附属幼稚園から、保護者との交流行事にて別の形でESDの実践を行ってほしいという依頼を受けた。

保護者との交流行事は、保育室やホール、中庭などを使った遊びのブースを5つ設け、園児が保護者と共にそれらのブースを回るスタンプラリー形式の行事であった。受講生に依頼があったのは、それら5つの遊びのブースの運営であり、その遊びのなかにSDGsの要素を組み込んでみてほしいというものであった。これは、③のプレゼンテーションのなかで受講生がESDに対して示した見解を踏襲したものであり、すごろくとは異なる形式でそれを実践することを求める点で、受講生にとってもチャレンジングな課題となった。

その後、ゼミのなかで準備を進め、完成した企画（SDGs広場）は、「おさかなをたすけよう（ゴミ分別ゲーム）」「なにでできているかな（クイズ）」「ひっぱれやさしいクイズ」「おやこヨガ」「SDGsパズル」の5つであった。企画内容の一部を説明すると、たとえば「おさかなをたすけよう」（写真2）は、マグネットをつけた釣り竿を用意し、魚ではなく空き缶などのごみを釣って、海をきれいにしていくというゲームである。このゲームをクリアした子どもは、SDGsの目標6「安全な水とトイレを世界中に」、目標12「つくる責任つかう責任」、目標14「海のゆたかさを守ろう」のロゴが印刷されたシールを獲得することができ、それを台紙に貼っていくことで、スタンプラリーとして遊ぶことができる。また、「なにでできているかな」（写真3）は、食パンやポップコーンといった身近な加工食品とその原料を用意し、どのような食品が何でできているかを結びつけるクイズである。このゲームをクリアすることで、目標2「飢餓をゼロに」、目標15「陸の豊かさも守ろう」のシールがもらえる。

以上の例のように、受講生は新たにスタンプラリーの企画を準備する過程で、子どもたちが日常的に行っている遊びや、身近な事物をSDGsと関連させる想像力を働かせることになった。事物と他の事物とのエコロジカルな関係について働かせる想像力は、「生態想像力」(Fesmire 2010, Judson 2010) と呼ばれ、身近な事物からESDを実践していく手がかりを生み出すものである(山本 2021)。また、受講生が、ひとつの遊びや生活体験に複数の目標との関連を見出していることは、SDGsの各目標間の関連を考えることにつながっている。このように、プロジェクトにおいて遊びをデザインする過程で、SDGsを身近な生活との関係から捉え、複数の持続可能性の観点を関連させて事象を捉える視点が表れてきたことは、獲得した知識を活用する「深い学び」としてプロジェクト学習が展開していることを示していると言えるだろう。



写真2 おさかなをたすけよう

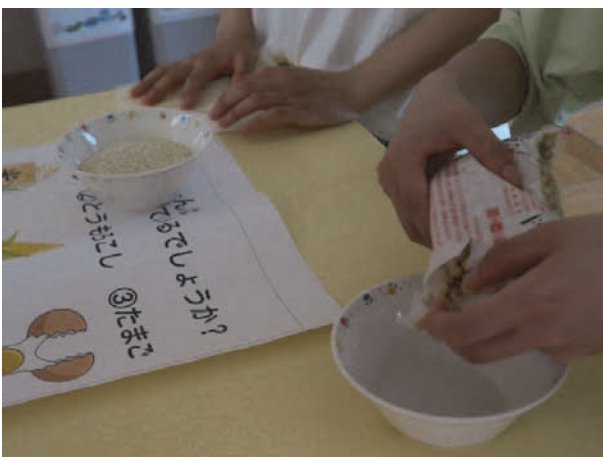


写真3 なにでできているかな

3-5. ⑤附属小学校および児童館での実践

その後も新型コロナウイルス感染症の影響で、附属幼稚

園でのすごろくの実践は実現しなかったものの、5名の受講生のうち1名が卒業研究として、附属小学校と児童館でのすごろくを用いた実践研究を行うこととなった。卒業研究として実践された結果についても他の受講生と授業内で報告・共有され、学びが深められた。

小学校および児童館の実践では、実際にすごろくで遊んだ後に展開する対話のなかに、SDGsに関連する内容が含まれることが観察された。たとえば、すごろくを終えた後に「募金マスがもっとほしい」と発言した児童と保育者のやり取りから、「募金したことある?」「あの募金って誰がもらうんだろう」といった、SDGsと日常の経験を結びつけた対話が展開していく様子が見られた(狩野 2022)。

4. 受講生のアンケートによる考察

4回生の最終回の授業では、全体を通して得られた学びについて、振り返りシートを作成した。プロジェクト全体を通して、受講生は以下に示す①～⑥の学びを得ていることが考察された。以下に振り返りシートの抜粋を示すとともに、関連する事例には下線と数字を記した。

【受講生が得た学び】

- ①SDGsについての関心と理解の深まり
- ②SDGsの各目標間の関連についての思考
- ③SDGsの各目標と日常生活との関係についての思考
- ④SDGsについて学んだ知識の活用としてのESD教材デザイン方略
- ⑤自分事としてのSDGsの捉え
- ⑥「つくることによる学び」の方略の獲得

事例1

①プロジェクト前は、そもそもSDGsという言葉を知っているくらいでそれ以外何も分かっていなかったし、正直興味もなかった。それが、子ども語に翻訳するという取り組みから、授業外でもSDGsのことを調べたりテレビや街でも見かけたり(今までもあったかもしれないが興味がなかったので気付かなかったと思う。)するようになって“すごろく”や“SDGs広場”もして、④⑤いつのまにかESD×幼児教育の部分みんなで真剣に考え、自分の中に落としこみながら取り組むことができたと思う。

事例 2

① ESD と SDGs については、カラフルなマークであることや環境問題について取り扱われているということぐらいしか分かっていませんでしたが、このプロジェクトを通して、1つ1つの目標を噛み砕いて理解することが出来、②③④ ジェンダー、教育、インフラ、海上・陸資源のこと等、身の回りの様々な環境問題がとても身近に思えるようになりました。③⑤ 食品ロスを無くすためのスーパーに向いたり、日常の生活の中で SDGs マークを見つけると「あ！」と思ったり等、このプロジェクトに出会う前と比べて、③⑤ SDGs を意識した生活となり、「環境のためにちょっとやってみようかな（やめておこうかな）」という気持ちを持って日々を過ごすことができています。

事例 3

① プロジェクトを行う前は、“SDGs”という言葉だけで、具体的な目的や開発目標などはあいまいで、あまり関心を持っていなかった。しかし、子ども語に訳すという取り組みから、“内容を理解する”ということをはじめ、“子どもに伝える”という取り組みにまで変化し、④ 受ける側から伝える側が変わったのが大きな変化ではないかと思う。言葉で言うのは簡単でも、「じゃあこれを達成するにはどうすればいいの？」となった時に、⑤ しっかりと自分の考えを持ち、提案できるまでには理解することができたのではないかと思う。

事例 4

活動していく中で、SDGs の内容や方針を少しずつ理解していき、すぐろくのマスを作る際には、ネットで各項目を調べることも減っていき、④ 自分たちの得た知識を出し合い、子どもが興味を持ちやすいようにと配慮しながらできるようになっていった。

事例 5

プロジェクトを通して、ゼロベース思考で物事を考えられるようになったと思います。⑥ 思い込みや先入観にとらわれず、新しいアイデアを生み出すことがとても楽しかったです。

振り返りシートの記述から、授業前に比べ受講生の SDGs や ESD への関心と知識が深まっていることが考察

される (①)。翻訳や教材作成の作業は、各目標間の関係を考えたり (②)、子どもの遊びや受講生自身の日常生活と SDGs の関係を考える機会 (③) を与えることとなった。そのような作業を通して、自分がサステナビリティについて教えたり伝えたりする立場であることが自覚され (④)、獲得した知識が自分事となっていったことが考察される (⑤)。また、「つくることによる学び」を実践することは、自分自身がアイデアを生み出すことによる学びとその楽しさの実感にもつながっていることから (⑥)、本授業での経験が、将来保育者となった際にプロジェクト型の活動や創発的なカリキュラムを実践するための準備ともなっていることが推察される。

5. 総合考察

以上のように、受講生たちがプロジェクトを主体的に展開したことによって、そのなかに多くの学びが得られたことが示唆された。

本研究は、保育者養成カリキュラムに ESD の観点を導入する際に、プロジェクト型の活動を行うことが有効であることを示している。その際、「つくることによる学び」の立場をとることによって、学生自身の関心と理解が自分ごととして展開していくことが重要である。本研究においては、「子どもことば」への翻訳の課題が、特に学生自身のコミットメントを深めるのに有効に働いたと考えられる。自分が子どもたちに伝える立場となることをシミュレーションすることによって、サステナビリティに関して自分自身の理解が足りない部分を深め、それらを自分の言葉で説明したり、活用可能な知識に変換したりする経験が得られることとなった。そのように SDGs への関心と理解が深められた上で教材をつくる活動が行われたことによって、学生自身が探究しながら教材を工夫するプロジェクトとなっていったと考えられる。

一方、本研究で作成されたすぐろく教材が、ESD 実践を行う上で十分なものであるかという点には検討の余地がある。本プロジェクトで作成された教材は、「幼児が楽しむことができる」ことに重点を置いて作成されたものであり、その点では十分に目的を達成することができた。しかし、遊具としての価値があるとはいえ、ESD に関する内容としては、SDGs のロゴに触れる経験が得られるという消極的なものにとどまっている。このことは、プロジェクトを通して到達した点は、ESD の入り口に過ぎず、得られたことの振り返りとさらなる改善が不可欠であることを

示していると言えるだろう。

そのことを踏まえた上で、今回作成されたすごろく教材のさらなる可能性を整理すれば、各目標のマスがSDGsに関連する体験と結びつくという点、また、募金という経済的な要素が導入されている点は、本教材が本格的なESDへの導入となりえるポテンシャルを示している。たとえば、各目標マスで与えられるミッションをより具体的なものにし、プレイ後に自分が止まったマスの課題の解決策を考えていくような小学校での授業の可能性が考えられる。また、児童館の実践での事例のように、自らの募金について生まれた問いを、寄付や国際協力の仕組みに結びつけて学習していくことも考えられる。目標マスや募金マスにQRコードを印刷し、SDGsに関連する学習教材とリンクすることも考えられるだろう。マスにどのようなミッションを仕掛け、その後の学習の展開に結びつけるかによって、SDGsを軸とした教科横断型の学びを促す仕掛けとしていくことが考えられる。

また、児童自身がすごろくを制作することで学ぶという方略も考えられる。たとえば、総合学習等での地域活動と関連させ、児童が地域のSDGs活動を調査してすごろくを作成することで、児童自身が「つくることによる学び」を実践していくこともできる。

SDGsというワードが社会のなかに浸透するとともに、SDGsを標榜しているだけで実態が伴わない「SDGsウォッシュ」の問題も表面化している。ESDがそのような空虚な結果を生み出すことがないように、教材や教育活動にさらなる工夫が求められるとともに、SDGsを自分事として考えていくことができるようになるための、教員・保育者養成の在り方を模索していかなければならないだろう。

謝辞

プロジェクトを実施した受講生の皆様の熱意とアイデアには、多くのことを学ばせてもらいました。また、研究の実施にあたりご協力いただいた、滋賀大学教育学部附属幼稚園・附属小学校の関係者の方、児童館の関係者の方に御礼申し上げます。なお、本研究の一部は、JSPS 科研費(20K13951)の助成を受けています。

注

- 1) Declaration of the 67th OMEP World Assembly and Conference
<https://omeworld.org/wp-content/>

uploads/2021/02/2015-World-OMEP-Declaration.pdf
(2022年3月21日閲覧)

- 2) OECD Education 2030
<https://www.oecd.org/education/2030-project/> (2022年3月21日閲覧)

文献

- Fesmire, S. (2010) Ecological Imagination, *Environmental Ethics*, 32 (2) , pp.183-203.
- 藤原さと (2020) 『「探究」する学びをつくる』 平凡社
- 井庭崇 (2019) 「構成主義の学びと創造—クリエイティブ・ラーニング入門」(井庭崇編『クリエイティブ・ラーニング—創造社会の学びと教育』慶應義塾大学出版会)
- 井上ひさし・いわさきちひろ (2006) 『井上ひさしの子どもにつたえる日本国憲法』 講談社
- Inoue, M., O’Gorman, L., Davis, J. & Ji, O. (2017) An International Comparison of Early Childhood Educators’ Understandings and Practices in Education for Sustainability in Japan, Australia, and Korea. *International Journal of Early Childhood*, 49, pp.353-373.
- Ji, O. & Stuhmcke, S. (2014) The Project Approach in Early Childhood Education for Sustainability: Exemplars from Korea and Australia. In Davis, J. & Elliott, S. (eds.) *Research in Early Childhood Education for Sustainability: International Perspectives and Provocations*. Routledge.
- Judson, G. (2010) *A New Approach to Ecological Education: Engaging Students’ Imaginations in Their World*. Peter Lang
- 狩野南 (2022) 「幼児・児童に向けたESD教材の開発—楽しんで触れるSDGsすごろく—」令和3年度滋賀大学教育学部卒業論文
- 大庭三枝・弘田陽介・春木憂・森美智代 (2020) 「OMEPアジア・太平洋地域大会 (APRC) 2019における研究発表記録」『福山市立大学教育学部研究紀要』第8巻, pp.1-10.
- サザーランド, J. 石垣賀子訳 (2015) 『スクラム 仕事が4倍速くなる“世界標準”のチーム戦術』 早川書房
- 谷口一也 (2020) 「SDGs時代の幼稚園教育領域『環境』のあり方」『教育総合研究叢書』13, pp.137-146.
- UNESCO (2008) *The Contribution of Early Childhood*

Education to a Sustainable Society, Paris: Author.

山本一成（2021）「生態想像力に基づく幼児期の持続発展

教育へのアプローチ—能力開発のジレンマを超えて」

『関西教育学会研究紀要』第 21 号, pp.15-28.

